

高知精神保健

発行所 高知市丸の内1丁目2-20
高知県子ども・福祉政策部障害保健支援課内
高知県精神保健福祉協会
電話：088(823)1111・088(823)9669(直)
FAX：088(823)9260
E-mail：kochi-mhwa@mopera.net
発行人 数井 裕光 編集人 諸隈 陽子

第280号

令和4年度 高知県精神保健福祉協会活動計画



高知県精神保健福祉協会
会長 かずい ひろあき
数井 裕光
(高知大学医学部
神経精神科学教室教授)

令和4年度に入り、新型コロナウイルス感染症の患者数が徐々に減少してきてはいますが、未だ県内でもクラスターが散発的に発生しており、引き続き慎重な姿勢が必要です。私達、高知県精神保健福祉協会も様々な制限下での活動を余儀なくされていますが、今年度は少しでもwithコロナ時代に応じた活動が出来ればと思っております。

さて、令和4年度の高知県精神保健福祉協会の活動についてご報告させていただきます。まず、今年度は役員の変更年でした。しかし私は会長を継続させていただき、副会長の山崎正雄先生（高知県立精神保健福祉センター）と橋詰宏先生（藤戸病院）、監事の佐藤博俊先生（はりまや橋診療所）も私から留任をお願いしてご快諾いただきました。各事業部の委員長についても研修委員長の山崎正雄先生、基金管理運営委員長の明神和弘先生（近森病院総合心療センター）、あり方検討委員長の岡田和史先生（海辺の杜ホスピタル）、総合福祉委員長の藤戸良輔先生（藤戸病院）は継続していただきました。広報委員長は、谷晃様（谷病院）から諸隈陽子先生（一陽病院）に若返りいたしました。任期1年間の大会実行委員会委員長は、今年度は藤戸良輔先生にお務めいただきます。

各委員会の活動について簡単にご報告させてい

ただきます。広報委員会では例年通り「高知精神保健」を年3回発行いたします。大会実行委員会では第61回高知県精神保健福祉大会の準備を順調にすすめていただいております、令和4年10月19日(水)の13:00～15:20に、高知県立県民文化ホール（グリーン）において講演会が開催されます。講師は、九州大学大学院医学研究院精神病態医学講座の准教授で、九州大学病院精神神経科気分障害ひきこもり外来を主宰されている加藤隆弘先生です。「こころの応急処置」～ひきこもりと家族支援～という魅力的なテーマで私もととても楽しみにしております。総合福祉委員会では、新型コロナウイルス感染症の拡大を懸念して卓球大会、バリアフリーフェスティバル、文化交流会は残念ながら中止の予定です。その代わりに、動画を各病院やグループなどで作成していただき、それを集めて一つの大きな動画に編集して、これを配信するという新しい企画を考えていただいております。皆様のご協力、ご参加を是非ともお願い申し上げます。研修委員会では、精神保健福祉従事者リフレッシュ研修と地域研修をともに中止の予定です。基金管理運営委員会では、障害福祉サービス事業所等に貸付事業を行っておりますが、現在は利用が少なくなってきており、今後利用促進方法について検討していきたいと思っております。最後に、あり方検討委員会では、この先、高知県精神保健福祉協会はどうあるべきかについて検討していただいております。今年度中に第一案を拜見できると聞いております。

今年度も引き続き、県民の皆様のお役に立てる協会作りを行っていきたく考えていますので、宜しくお願いいたします。

目次

令和4年度 高知県精神保健福祉協会活動計画	1
メンタルヘルスの時代に	2

高知県精神保健福祉協会 令和4年度事業計画	3
精神障害者当事者の居場所「たてよこ・ななめのフリースペース」	4

メンタルヘルスの時代に

高知県精神保健福祉協会副会長 山崎 正雄
(高知県立精神保健福祉センター所長)



精神保健福祉の世界は、大きく変わってきました。長く、この道を切り開いてきた統合失調症を中心とした精神科医療、精神障害者福祉の現場に、新たな課題が次々と押し寄せています。私が精神科医になった時代には、その言葉さえ聞くことのなかった「発達障害」。国家的な課題となっている「自殺」「ひきこもり」「依存症」の問題。精神保健福祉センターの役割も、既存の枠組みの中では対応が難しいこれらの課題に対して取り組むべく、国が舵を取ってきました。さらには、少子高齢化社会が進む中で、認知症高齢者への対応、母子メンタルヘルス、児童虐待の問題なども喫緊の課題として取り上げられているところです。近年のこうした変化の中で感じるのは、地域で生きづらさを感じながら生きている人々の問題が、特殊な問題ではなく、住民の「メンタルヘルス」の問題としてとらえられるようになり、過去とは比べられないほど市町村で検討課題としてとりあげられるようになったことです。しかしながら、生きづらさを抱えた人々が、周囲に理解されているかというとまだまだ十分ではありません。精神保健福祉協会でも、研修委員会では精神保健福祉従事者研修や当事者を交えた地域研修を例年行ってきました。精神科医療や精神保健福祉を地域で知ってもらうこと、また逆に、地域の実情

を精神科医療機関の人々に知ってもらうことを心がけてきました。そうした活動を繰り返す中で、最近気づいたことがあります。それはこれまで、精神障害者や精神科を利用される人たちは、なんら他の人と「変わっていない」こと、「ふつう」の人なんだと強調してきたことが果たして良かったのかということです。それよりも、ふつうになりたくてもなれない人、他の人とは違う、変わった行動をしてしまうことを受けとめ、認めていくことこそ大切なのではないか。「変わっててもいい」「人と違っててもいい」。一人ひとりの生きづらさを受けとめ、個性を尊重していく社会を実現することが大切なのではないかと感じるようになりました。それを教えてくれたのは、精神障害者と言われる人々が、専門的に理解してくれているであろう専門職に囲まれた世界でではなく、変わっていても、ふつうになれなくても、その存在をありのままに受けとめてくれる農家さんや炭焼きの人のいる現場でいきいきとした笑顔をみせている姿に出会ったことです。これからの精神保健福祉は専門職だけでなく、住民を巻き込んだ包括的な取り組みが今後ますます大切になっていくことでしょう。私たちも、地域とともに歩む精神保健福祉協会を目指したいと思えます。

高知県精神保健福祉協会 令和4年度事業計画

1. 広報委員会:委員長 諸隈陽子(一陽病院)
 会報「高知精神福祉」の発行、年3回(各2,700部)
 精神保健福祉大会をはじめ、協会関連事業や県
 内トピックスの取材
 協会ホームページの管理・運営

2. 大会実行委員会：大会委員長
 藤戸良輔(藤戸病院)
 第61回高知県精神保健福祉大会の企画・運営
 開催日:令和4年10月19日(水) 13:00~15:20
 場 所:高知県立県民文化ホール(グリーン)
 テーマ:「こころの応急処置」
 ~ひきこもりと家族支援~
 講 師:加藤 隆弘 氏
 (九州大学大学院医学研究院精神病態
 医学准教授)

3. 総合福祉委員会：委員長
 藤戸良輔(藤戸病院)
 精神保健福祉卓球大会、バリアフリーフェス
 ティバル、文化交流会は中止
 WEB版文化交流会を企画

4. 調査研究委員会
 令和4・5年度は中止

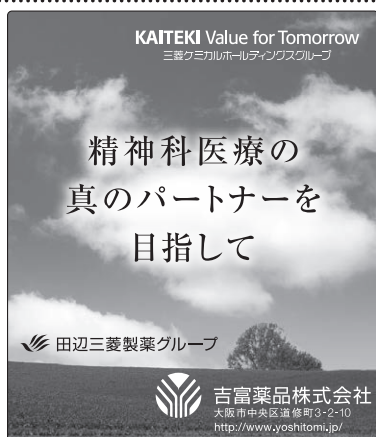
5. 研修委員会：委員長
 山崎正雄(高知県立精神保健福祉センター)
 例年の精神保健福祉従事者リフレッシュ研修
 会、当事者参加型の地域研修会は中止
 Web研修会での実施を検討中

6. 基金管理運営委員会：委員長
 明神和弘(近森病院総合心療センター)
 精神障害者の自立と社会復帰の促進を図る事
 業に資金の貸付(無利子)を行なっている。
 貸付金の償還期間は原則1年であるが、状況に
 応じて延長可能。
 本年度の貸付件数(令和4年6月現在3件)

高知県精神保健福祉協会ホームページ

URL=

<http://kochi-mhwa.sakura.ne.jp/>



精神障害者当事者の居場所

「たてよこ・ななめの フリースペース」

主催：高知市精神障害者家族会連合会

会長：松尾 美絵

今回は、高知市江ノ口コミュニティーセンターで開催されている高知市精神障害者家族会連合会さんの『たてよこ・ななめのフリースペース』にお邪魔しました。

会場に入らせていただくと、フリースペースの名の通り、何かに縛られることなく自由に活動ができる居場所がそこには広がっていました。会長の松尾さんによりますと、

当事者さんの居場所としては、病院のデイケアや地域活動センターなどがあります。ここでは、ドクターの診断や行政の許可などが必要です。内容としては、あらかじめプログラム化されたものが主です。このような居場所は、重要で意義あるものです。

さらにこれらにプラスして、当事者を主にしながら、家族やボランティア、関心のある方など誰でも参加でき、その内容についても当事者が主体となって計画していくことができるような居場所を作りたいと考えました。入院治療から地域での生活が主流となっていく現在、当事者の居場所作りは大切だと思います。

理想は、定位置の建物があり、毎日開かれていて、そこには誰かが必ず居るといような形だと思えますが、家族会にはそのようなお金もマンパワーもありません。とはいえ、何かひとつでも先に進めたいという思いで、とりあえず公的な場所を借りて、月1回でも集まることができる場を構えたいと思い、今年の5月から取り組みを始めています。いろいろな人とのつながりを作っていきたいと考え、たてよこ・ななめの人間関係、そして自由に集まることができる空間として「たてよこ・ななめのフリースペース」としました。

当事者さんは、いろいろな力や趣味、魅力を持っています。ピアノやギターなどの音楽を楽しむ人、写真撮影、モデルになる人、また絵や詩作などの文芸に関心のある人などもいます。

まだ始まったばかりなので今は、それぞれが、どのようなことに関心をもっているのだろう、何をやりたいのだろう、また日常の悩み事はないのだろうか、などなど出し合いながら、少しずつお互いへの理解を深めていくことから取り組んでいきたいと考えています。その中から、日常的なつながりや支えあいができたり、みんなでやりたいことがあればイベントごとなどもできていくと思います。

当事者さんが自己表現できる力を持ち、自らが主体となって活動できることを願い、参加者みんなが力を出し合い、支えあいながらやっていきたいと思えます。長いスパンで考えて、回を重ねるうちに、なんらかの形あるものになっていくのではないかと、希望を持っています。そして、多くの人に知ってもらい、さまざまな分野の方々とのつながりができていくことを期待しています。当事者さんは、よろこびや安心を得て、地域で生活していくことがより豊かなものとなっていくと考えます。人とのつながりは双方向ですから、それはとりもなおさず、精神障害への理解も深まり、当事者以外の人々にも豊かさをもたらし、共に生きることの幸せを感じられるものと信じています。

という力強いお言葉を頂きました。今回の取材を終えて、居場所があることの重要性やその居場所の中で主体的に当事者の方々がキラキラとした表情で活動されている姿を見ることができました。

このような活動が県内各地に広がっていくことを期待しています。

高知市精神障害者家族会連合会ホームページ

<http://kouchi-kazoku.2box.jp/>

